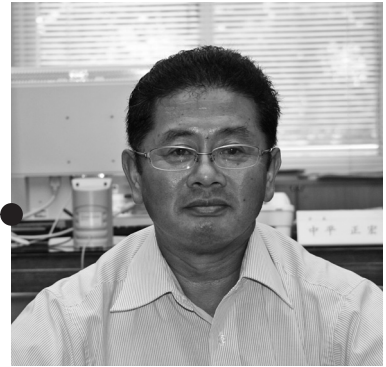


# DEBUT 首長

高知県四万十市長 中平 正宏氏



なかひら・まさひろ 1956年四万十市(旧西土佐村)生まれ。75年高知県立中村高校を卒業。20代は東京などでアルバイトに明け暮れる。30歳でUターンし就農。西土佐村村議を経て03年に村長。05年に四万十市助役・副市長。13年4月に初当選。57歳。

## 地場産品生かし食品産業振興「41度」、観光振興に追い風

**四万十市** 高知県西南部の中心で、2005年に中村市・西土佐村が合併し誕生。人口約3万6000人。日本最後の清流といわれる四万十川の下流域に当たる。

——四万十市をどんな街にしたいのか。

産業振興に取り組むことで、雇用の場を創出し、若い人たちが前向きになれる街にしたい。高知市内から車で2時間30分程度かかり決して便利な地域とはいえない。農業が盛んな地域だが、それだけで家族を養える農家は決して多くない。商工業を見ても基幹となる産業があるわけではない。多くの若者が働き口を求めて県外に出てしまう。

ただ、一つ一つの産業は弱くても組み合わせ次第では成長できる潜在能力はある。例えば、四万十市は米ナスやユズなどがおいしいといわれる。こうした産品を使って加工食品を開発していけば、食品加工産業を育成することができる。数値目標も設定した産業振興計画を策定し雇用の場創出につなげたい。

——四万十川を抱えている。観光振興は？

観光は産業振興の目玉になり得ると思っている。何といても、全国的にも知名度の高い四万十川がある。四万十市は下流域に当たるが、岩などが少なく有名な沈下橋も多い。観光客が思い描いている「日本最後の清流」というイメージ通りの風景が楽しめる。2012年に放送されたドラマ「遅咲きのヒマワリ」の影響で若い人たちがロケ地を訪れるようになっている。

——西土佐の江川崎で日本最高気温41.0度を記録した。

知名度向上につながり、観光振興には追い風となる。最高気温にちなみ地元の産直市で売られた41円のかき氷は飛びように売れており、テレビや新聞で報道された「ようこそ!!日本一あついまち」の看板の前には記念撮影する家族連れで一杯だったと聞いている。ピーク時のお盆シーズンでも1日の来店客が200人程度だった産直市に最大で1200人が訪れた。こんなに江川崎に人がいるのを見たことがないほどの盛り上がりぶり

だった。来年以降も勢いが維持できるように「41」をキーワードにした振興策を考える。

ただ、農家にとっては悪影響が避けられない。中山間地域では谷川の干上がっているところもあると聞く。自分も農家を25年以上経験したが、こんなことは初めてだ。国や県などと連携しながら、きちんと対応していきたい。

——高知県は南海トラフ地震で大きな被害を受けるといわれている。

高知県の試算によると、最大で3600棟の建物が倒壊するなど被害が出て、死者は900人に上るとされた。被害を少しでもゼロに近づけるように対策を講じる。津波の避難路や避難タワー、緊急避難所は14年度中にほぼ整備が完了する。市単独は難しいかもしれないが、国や県と連携しながら電柱の地中化や家屋の耐震化にも取り組む。(聞き手は

高知支局長 古宇田 光敏)